

平成23年度 甲子園指導者研修報告



1. 期間

平成23年8月8日(月)～10日(水) —2泊3日—

2. 場所

阪神甲子園球場(兵庫県西宮市)

つと
津門中央公園野球場(兵庫県西宮市津門住江町)

3. 宿舎

アパヴィラホテル(大阪市中央区農人橋1丁目)

4. 内容

8日 試合視察 関商工 — 如水館
至学館 — 東大阪大学柏原

9日 練習視察 日大三
試合視察 能代商 — 神村学園
白樺学園 — 鳥取商
智辯和歌山 — 花咲徳栄

理学療法士サポート
球場施設・設備見学

10日 試合視察 日大三 — 日本文理

5. 参加者

木村 徹(北信支部 飯山北) 横川 誠(東信支部 野沢南)
倉田 真(南信支部 駒ヶ根工業) 野口洋志(中信支部 塩尻志学館)
寺澤誠一(本県連盟監事 責任者)

意欲溢れる若き指導者と共に今年も甲子園研修に参加した。今回で7回目の参加となるが、毎回何かしら新しい発見や感動を体験することができる。

今回は、研修二日目の練習視察で日大三高の小倉全由監督にお話を伺うことができた。初戦前日の大事な、しかも2時間という限られた練習時間の中、わざわざスタンドまで足を運んでくださった小倉監督に心より感謝申し上げたい。本研修がスタートした際には、大会出場監督との懇談も実施されたが、二泊三日の研修では時間の制約もあり、それ以後は行われていない。そんな中、短時間ではあったが今大会優勝校の小倉監督と話す機会を持てたことは、大きな収穫であった。



練習会場の津門運動公園野球場



日大三の小倉監督に話を聞く

研修名称・宿泊先の変更、一般財団法人化後初の甲子園研修ということもあり、新たなスタートとも言える今回の研修であった。今後も本研修が始まった際の「若手の指導者に甲子園を直に見て知ってもらい、意欲を高めてもらおう」という趣旨を大切に、本県高校野球の更なるレベルアップにつながるよう、各関係機関と連携し一層の充実を図ることを願う。

平成 23 年 8 月 23 日

甲子園研修レポート

野沢南高校野球部

監督 横川 誠

はじめに

甲子園研修出発前、今回の研修で何を学ぶかを考えていました。一番は、初めて間近で見る甲子園を純粋に楽しむことです。その中で、甲子園で活躍するチームはどんなチームかどんな選手かを間近にみて学び、甲子園という場所を肌で感じ日々のモチベーションにできればと考えてこの研修に臨みました。

初めて見る甲子園球場に圧倒されたまま、インタビューの行われる廊下を通り選手の通る坂を通り球場へ行きました。1球1球に沸くアルプススタンドにたくさんの観客、グラウンドのきれいな黒土、整備された芝、スピード・スケールが高さに魅了されました。ファースト側のバックネット裏の席で観戦させていただきました。試合は、如水館 VS 関商工の試合でした。同点でむかえた延長12回裏の攻防がとても緊迫していたのを覚えています。如水館攻撃で無死1、2塁になり、この試合決まったと思いました。しかしそこからスリーバント失敗で1アウト、バントの大切さを改めて感じました。1、2塁間の難しいゴロをセカンドがさばいてセカンドに送球して2アウト、ゲッツーは無理だと判断したショートがサードランナーのオーバーランを狙って送球も間一髪セーフ、なおも如水館のチャンスでサードライン際に強烈なゴロもサードがファインプレーで3アウト、サヨナラのチャンスを見事関商工が防ぎました。

次の日に如水館のサヨナラ勝ちで試合は終了しましたが、関商工の最後まであきらめない気持ちと確かな技術を感じ、一試合目から非常にレベルの高い試合を観戦できました。

2日目は全国制覇を成し遂げた日大三高の練習を見学させていただきました。練習会場には限られた設備しか与えられておらず、日大三高は大型のトラックにバッティングマシン2台とネットをもってきていました。このような事前の準備も大切だと感じました。練習はキャッチボールが終わり、シートノック、シートバッティング、3カ所のフリーバッティングの順で練習でした。ノックを見ていて印象的であったのは、外野手で投げた人がカットを言っていました。甲子園では、歓声も大きく聞こえづらく、また投げた本人が一番わかる点で参考になるなと思いました。練習の雰囲気は、落ち着いており何か余裕のようなものも感じました。シートバッティングでは、外野手の少しの隙も見逃さない走塁にバッティングの日大三高と言われながらもその走塁技術の高さに感心させられました。バッティング練習では、評判通りの打撃ほとんどの打球が外野の柵を軽々越えていきました。桁違いの打力にただただ感心するばかりでした。

2日目の最後には室内練習場やベンチの中からグラウンドを見ました。ベンチから見るグラウンドにただ圧倒されてしまいました。自分がまだここに来るには未熟すぎであると感じさせられました。その後は、選手のダウンの風景を見ました。1チームに何人ものスタッフがつきダウンをサポートしていました。随所で高校野球は本当に多くのスタッフに支えられているのだと感じました。

3日目は昨日に練習見学をさせていただいた日大三高と日本文理の試合でした。試合は中盤まで互角の戦いでしたが、終盤に日大三高打線が爆発しました。そのなかで印象に残ったことは、一人一人が自分の仕事に徹していると感じました。9番打者の11球粘って12球目を詰まってセンター前に落とし、練習でも意識していた相手の隙を突いた走塁をしていました。強打の印象はもちろんのこと細かいプレーまで追求しなければ全国制覇はできないのだと感じました。

3日間の研修を通して強く感じたことはスケールやスピードはもちろんですが、バントの大切さと外野手のレベルの高さです。バントの失敗がいくつもあり、やはり甲子園レベルのピッチャーからはバントをすることも難しいなかでも、1発で決めることが流れを変えないことにもつながると思いました。また、どのチーム外野手も守備範囲が広く、ボールへの詰めも速かったです。そして、ライトからショートに守備交代するなど外野手の運動能力の高さとフライを捕れるか捕れないかで試合の勝敗にまで影響を及ぼすといっても過言ではない外野手の重要性を感じることができました。

まとめ

今回の研修で改めて甲子園という場所は、素晴らしい場所、夢のような場所であるということを感じることができました。私が選手として夏の甲子園に立つ夢はもう叶いません。しかし、その夢を生徒に託し、ともに成長していく気持ちを忘れることなく、あの場所を目標にして指導していくことを再確認できました。今回このような研修にあたりご尽力してくださった長野県高校野球連盟、ご行動をともにしてくださった先生方には心から感謝しています。ありがとうございました。今後もこの研修で感じたこと、学んだことを忘れず生かしていきます。

甲子園指導者研修報告書

長野県駒ヶ根工業高等学校

倉田 真

1. 甲子園選手について

甲子園に出場する選手をみて、改めて感じたことは「体の大きさ」。中には、自分自身の周りで見ると体つきの選手もいたが、それはごく一部。多くは一回りも二回りも大きい選手で、結果、35℃の中で9回を戦い抜ける体力、140^{キロ}の球に振り負けないパワー等の基礎体力は、本校の選手との差は比較にもならなかった。生まれつきもっているものに違いがあり、比較すること自体が間違いかもしれないが、甲子園で勝ち抜くためには、技術と体力が必要であることを再度認識した。

あとは、ふてぶてしさ。見方を変えると、Fの精神からはずれたプレーとしてとられる可能性もあるが、大歓声や多くの視線の中で自分のプレーをするには必要な要素(かも?)と感じた。お人好しの選手では、地に足が着く前にゲームが終わってしまうと思った。

ただ、ふてぶてしい選手の多いたチームも見たが、チームワークには疑問を感じた。同チームは、劇的な試合の勝ち方をしても1人の選手が喜んでいるだけで、他の19人はそっけなかった。今回見たチームの中で、力では劣る相手でもチーム力で勝ち抜く「なでしこジャパン」のようなチームが少なかったことは残念だった。

「学校教育の一環として位置づけられる」とうたう日本学生野球憲章の難しさを感じた。

2. 甲子園応援について

責任教師の立場で甲子園を見ると、甲子園の応援と長野県高野連で唱える「応援心得」の違いに疑問を持った。特に、近年厳しく注意されている「攻守交代時の静寂な時間」はほとんどなかった(甲子園でも禁止されているかもしれませんが)。どちらが正しく、どちらが悪いわけではなく、甲子園でも地方でも同じ高校野球として統一されると良いと思った。

3. 甲子園野球について

見たどのチームも特に変わった野球をしておらず、基本に忠実な野球だった。色気を出したプレーが逆に仇となってチャンスをつぶしたり、失点を招いていた。

ただ、「コーチ等が捕手のサインを読み取って打者に球種等を伝える」行為は見られた。長野県でも再三みられるが、連盟の注意を忠実に実行するチームが損をするような高校野球であってはいけないと思う。どちらが正しいか分からないが、表面上だけの「Fの精神」は見直す必要があると改めて感じた。

4. 甲子園について

やはり、憧れる場所だった。選手としてグラウンドに立つことはできないが、高校野球に携わる1人として目指す場所であることを再度確認した。

近年、中学校まで野球をやっていたが高校で野球をやらない、という生徒が多いように感じる。色々な原因はあると思うが、1つに「高校野球をする目標」が薄れていると感じている。具体的に、そういう生徒の大半は「高校野球の甲子園」を見たことがないのではないかと思う。

アルプススタンドからの大声援、1球に湧きあがるバクネットからの大歓声、甲子園球場の雰囲気。画面からは感じることのできない「生の甲子園」に入れば、「聖地」と呼ばれる意味が分かると思う。ぜひとも、中学生時代に「高校野球の甲子園」を肌で感じて欲しいと思った。

自分自身としては、球場裏にも入らせてもらい、テレビでしか見たことのなかった選手たちが歩く「あの坂」(通路)やインタビュー風景、ベンチ内や室内練習場も見せてもらった。長野県代表校が宿泊する宿舎にも泊らせてもらい、全国の頂点を目指す高校の練習風景も見させてもらった。この研修に参加させて頂き、最近では感じ得ることのできない刺激を頂いた。それとともに、この職業に就こうと決めた理由を思い起こすことができた。

5. 要望

次年度以降の同研修期間の変更を要望します。今回の時期8月8日～10日だと予備戦と重なり、特に監督の先生方の参加が難しいためです。お盆も難しいかもしれませんが、予備戦と重なるよりは参加しやすいと思います。

甲子園研修報告

塩尻志学館高校 野口洋志

8月8日から8月10日までの3日間恒例の甲子園研修が行われ、中信代表として甲子園球場での研修に参加させていただいた。実際に試合観戦や甲子園球場の中を見させていただいていろいろと感じるがあった。

まず、感じたこととしては暑さという面である。私は甲子園球場に行くのは初めてだったが、長野県とはまた違った蒸し暑さを感じ、なにもしなくても汗が噴出してきた。実際にプレーをしている選手たちは、更に暑さを感じているはずである。暑さ対策としては、ベンチのなかのクーラー設備、扇風機などの設備、更にはこまめな水分補給の指示などが主なところになっているようだ。常設の医師や試合後の理学療法士による入念なクールダウンをみても選手の健康管理にかなり気を使っているかが良くわかり、私も顧問として、大いに参考になった。

続いて試合観戦を通して感じたことを述べる。

甲子園出場チームと長野県のチームとの違いでまず感じたことは、下半身の大きさという点だ。実際に、テレビではなく近くで見させていただくと腿やお尻の太さが比較にならない。下半身は野球においては、バッティングはもちろんピッチングや守備のすべてのプレーも基本になってくる大切な土台である。やはり、強豪校になればなるほど、走りこみや筋力トレーニングなどの、つらくて地味な反復練習を繰り返しているのだなと思った。

攻撃面では、バントと走塁が挙げられる。甲子園のピッチャーは140キロを超え、鋭い変化球を投げ、なおかつ制球力にも優れている。このようなピッチャーに加えて、内外野の守備範囲や肩の強さも相当なものがある。ゆえに、連打は出にくく、いかにチャンスをつくるかが重要になってくる。そのひとつの要素として、私はバントを確実にきめることが大切だと改めて感じさせられた。さらにもうひとつの要素として走塁があげられる。甲子園の選手たちは、みな総じて進塁意識が高い。オーバーラン後の相手の守備がどうなっているのかや、ゴロの強弱によって進塁できるのかなどの判断が早いということだろうと思う。長野県の地区大会レベルでは、オーバーランなどでも形だけしていて、そのプレーに必死になってやっていることが伺えるが、甲子園出場校では、走塁に対して、自分が次になにをすればいいのかがしっかり自分の中でできていて、常に考えながら走塁ができていると感じた。

守備面では、選手同士の声の掛け合いと守備範囲の広さが挙げられる。選手同士の声の掛け合いは、ピンチのときは当然のことだと思うが、特に強いチームになってくるとキャッチャーが内野手や外野手の位置を逐一指示していたり、内野同士がお互いに声を掛け合う姿が普通に見られる。ピッチャーに対しても、声だけではなく、ジェスチャー

などを通して意志を伝えあい、ピッチャーを一人にしていなと感じた。守備範囲の広さに関しても、あらかじめバッターによって守備位置を変えていたり、打球に対する予測が早かったりといろいろな要素があると思うが、これらのことは厳しい練習と上述した通り、自分で考えながら野球をしていることだと感じる。

今回の甲子園研修を通して、改めて基本の大切さを感じた。プレーのことについてもそうだが、挨拶や感謝、甲子園球場内での試合外での態度など全国の高校球児が見本にしてもらいたいことが多々あった。また、甲子園の内部を見させていただいて、甲子園の役員サイドも見させていただいて、大変貴重な経験をつまさせていただいた。甲子園独特の雰囲気を味わいながら、3日間という限られた時間を有意義に過ごさせていただき、是非生徒とともにこの素晴らしい舞台に立ってみたいと思った。

今回は貴重な体験をさせていただき、企画してくださった方、引率してくださった寺澤先生をはじめとした先生方には深く感謝しています。ありがとうございました。